

*演題分類番号

第1希望：18（漢方）

第2希望：1（医薬品適正使用）

■抄録

○発表者・所属

発表者：姫野榮志、清水太一、堀居真二

所属：総合メディカル株式会社・そうごう薬局・行橋南店

○演題名

漢方薬煎剤をパック包装にした際の、成分抽出量に与える影響

○抄録本文

【目的】

漢方薬の煎剤は本来、生薬を包装袋から出し、バラ（未包装）の状態で煎じるものであるが、煎じ終わった後のかすを処理する際の利便性の良さから、ティーバッグのように和紙または布袋に入れてパック包装にして渡すことが多い。生薬の成分抽出量は、生薬の剤形や水との接触面積などにより影響を受けることが明らかになっており、パック包装にすることや、その際の袋のサイズ設定により、抽出量が影響を受ける可能性がある。しかし、その影響の程度を検討した報告は見当たらない。

そこで本研究では、煎剤をパック包装にした際に成分抽出量がどの程度影響を受けるのかを、高速液体クロマトグラフィー（HPLC）を用いて検討した。

【方法】

ウチダ和漢薬製の生薬自動分割分包機「テアップエース」（生薬分包紙：無地 煎剤用 230）を用いてパック包装とした生薬と、パック包装としなかったものを、それぞれ専用の煎じ機を用いて同一条件で煎じ、その煎出液の成分濃度を HPLC で測定した。パック包装品は、充填率約9割のパック（小）と、充填率約5割のパック（大）の2種類を作成した。漢方薬としては、多くの漢方薬の基本骨格となつたとされる「桂枝湯（構成生薬：桂皮 4g、芍薬 4g、大棗 4g、甘草 2g、生姜 1.5g）」を選択し、封入量の調整のために2倍量として用いた。

【結果及び考察】

未包装状態で煎じたものと比較した成分抽出量は、パック（大）では 65～85%、パック（小）では 50～72%程度まで低下していた。特に、桂皮由来成分である *cinnamic acid*（大：65.6%、小：50.1%）、*cinnamaldehyde*（大：59.7%、小：44.9%）と、抽出量の減少が著しかった。他の生薬由来成分に関しても、芍薬由来の *paeoniflorin*（大：74.8%、小：63.3%）、甘草由来の *glycyrrhizin*（大：77.4%、小：59.9%）、更に未同定成分も、ほとんどで同様の傾向が見られた。

この結果より、煎出時は袋から出した状態で煎じることが望ましく、パック包装の状態で煎じる場合は、袋への充填率が可能な限り小さくなるよう、大きいサイズのパック包装を選択する必要があると考えられる。

【キーワード】

漢方薬、煎剤、成分抽出量、パック包装、充填率